

存続「たり」体

打消「ず」用

雪のいと高う降りたるを（みかうし）例ならず御格子（みかうし）参りて、

（k）作者↓中宮定子

炭櫃（すびつ）に火おこして、物語などして、集まり候（く）ふに（k）作者↓中宮定子

格助

推量「む」終

「少納言よ、香炉峰の雪、いかならむ。」と仰（k）作者↓中宮定子せ

形動・ナリ活用・未 （k）作者↓中宮定子

尊（うん）「已」
らるれば（使役「す」用御格子上げさせて、御簾を高く上げたれ（完了「たり」已

形・ク活用・用

尊敬「す」用

ば（ば）笑はせたまふ。

（k）作者↓中宮定子

格助

人々も、「さることは知り、歌などにさへ歌へど、

格助

格助 副助

格助

思ひこそ寄らざりつれ。なほこの宮の人には

格助 係助

当然「べし」体 推定「めり」終

さへきなめり。」と言ふ。

断定「なり」体

清少納言が白居易の漢詩を思い出して、当意即妙に対応したことで中宮定子様や周りの女房たちから褒めてもらった、という内容。

白居易の漢詩の当該部分はこちら↑

遺愛寺鐘欵枕聴

（遺愛寺の鐘は枕を欵てて聴き

いあいじのかねはまくらをそばだててきき）

香炉峰雪撥簾看

（香炉峰の雪は簾を撥げて看る

こうろほうのゆきはすだれをかかげてみる）

雪がたいへん高くまで降り積もっていたのに、いつもとは違って御格子を下ろし申し上げて、炭櫃に火をおこして、（女房たちで）お話などをし、集まって控えている時に、

「少納言よ、香炉峰の雪は、どうであらうか。」と

（中宮様が）おっしゃられるので、（私が）御格子を上げさせて、御簾を高く上げたので、（中宮様は）お笑いなさる。

（中宮様にお仕えする）女房達も、「そのようなことは知っているし、歌などにまでも歌うけれど、（とっさのことで）思いもありませんでした。やはり（あなたは）中宮様の女房にふさわしい人のようですね。」と言っ。

遺愛寺の鐘は枕を傾けて聞き

香炉峰の雪は簾を持ち上げて見る